

日本・尺八紀行

エイドリアン・ベイン

(翻訳: 森 麻里子)

今年の6月、東京・国分寺にある尺八道場・禅茶房で奥田敦也先生にお目にかかった。丈の長い地無し延べ管で、「手向け」を奏でる奥田先生。その向かいに座る私。どうして、また、こんなありそうもない場面に居合わせることになってしまったんだろうなどと考えながら聴いていた私は、そのメランコリックな美しい調べに、ほとんど目頭が熱くなるほどだった。

尺八を始めたのは去年(2006年)の8月だから、まだ、それほど経ってはいない。そういえば、そもそものきっかけはなんだったのだろう？



奥田敦也先生 写真: エイドリアン・ベ

日本人である妻が、「箏座」というグループのCDをプレゼントしてくれたことから、私の尺八への道は始まった。そのCDの何曲かには、尺八の演奏が入っていて、私はいたく感動した。「これ、なんていう楽器なの？」と妻にきくと、彼女は、尺八だと思うけれど、実は、尺八についてはほとんど知らないという。クリストファー・ブラズデルも著書「シングル・トーン」の中で指摘しているが、雅楽や伝統的な楽器について、よく知らない日本人はたくさんいるようだ。

その後、私は、尺八のCDを数枚購入し、その調べにすっかりはまってしまった。私の中で何かがどよめいた感じだった。数ヶ月後、手持ち無沙汰になったある日の午後、なんとなくいつも気にかかっていた尺八について、インターネットで検索して少し調べた。そのときは、まだ、興味本位程度だった。しかし、買い物から帰ってきた妻に、「ネットで尺八注文したよ」と言うと、妻はえー！？という感じだったが、そう言っている自分にも相当驚いた。なんだか、不思議な瞬間だったが、と同時に、それは自分にとって重要な瞬間でもあった。

1週間後、説明書とCDが同封された尺八が届いた。尺八のことはまだよくわからないので、今回購入したのは、レジン樹脂を型にはめて作った尺八「悠」。さて、おもむろに、尺八を手にして座る。目の前には、わけのわからない記号の並ぶ楽譜・・・こうして、尺八の旅が始まった。

初めて音を出すときは、緊張しすぎて、指を強く押さえすぎたり、指を動かしながら息を吹き込むということがいかにむずかしいか、感じのつかみにくい管楽器の音程、とても変な表記法などにだれもが戸惑うと思う。すこしでも満足いく音が出せると、数ヶ月間のフラストレーションも報われる。妻が私の尺八にあわせて、体を揺すっているのをみたときは嬉しかった。が、あとで、それは、ブタのキーキー声を彷彿とさせる私の尺八をシャットアウトするために、イヤホンで他のポップミュージックを聴いているのだとわかってショックだった！これは、本格的に先生のレッスンをうける必要があると思った。

しかし、先生をみつけるのには困った。というのも、私が住んでいるのは、イングランド・ケント州、しかも、海岸からは数百メートルという東端である。ロンドンに出るにも電車で2時間かかる。が、ロンドンに先生がいた。やはり、習いにいくべきだ。インターネットでキク・デイ先生のことを知り、連絡すると、快く、来てくださいとおっしゃった。キク先生がいて本当に助かったし、毎回のレッスンで得るものがあつた。

わずか2回の貴重なレッスンをうけたばかりというところで、問題がでてきた。仕事で7ヶ月間、北部のシェフィールドに行かなければならなくなった。これでは、キク先生のレッスンを受けることはできない。ところが、キク先生が、「実は、定期的にシェフィールドまで教えに行っている」と言ったとき、話は予想外の展開となった。なんたる幸運！ほんとうにまったく思いもしなかったことで、いろいろなことが起きる人生の中でも、すばらしいパターンだ。



キク・デイ先生
写真: エイドリアン・ベ



鎌倉の竹

写真：エイドリアン・ベ

こうして、シェフィールド滞在期間中も、キク先生のレッスンを2度うけることができた。ホテルの部屋でも、一人で練習した。音が殺風景な廊下をつたって他の宿泊客にも聞こえているだろうと気にしながら。

尺八「悠」には、モンティ・レブソンが手を加えたものがある。彼は、「悠」の内側にうるしを塗り、継ぎ目部分を真鍮とラタンで補強し、見栄えもよくなった。私は、クリスマスにこの改良版「悠」を購入した。この尺八は、音に深みがあり、チューニングも優れている。

7ヶ月間のシェフィールド生活を終えるやいなや、今年の6月、私は妻と2週間、日本に行ってきた。今回の滞在は尺八がテーマだ、とばかり張り切った。妻の家族は、私が尺八を習っているときいて、あることを計画してくれた。

日本に着いた翌日、妻の家族は、尺八を作っている大橋鯛山という人がいるという、山々に囲まれた町、神奈川県大井町金子まで車で連れて行ってくれた。鯛山先生は、貴重な時間を割いて、緑茶を飲みながら、尺八の話しやアドバイスなどをくれたり、演奏もしてくれた。義理の母が通訳してくれたのだが、同行した義父や義姉も含めて、案外、家族も尺八の話を楽しんでいたようだ。

同じ日の午後、家族が今度は横浜・白楽の駅のそばにある骨董屋にも連れて行ってくれた。オーナーの石田さんは、尺八を専門としており、尺八について、時間をかけていろいろ語り、すばらしい演奏も披露してくれた。かなり古いものから比較的新しいものまで、いろいろな種類の尺八を見せてくれ、何本かは私にも吹かせてくれた。本物の竹でできた尺八を吹いたのはそれが初めてだった！

次は、寺、神社、史跡などであふれる鎌倉に行った。長谷の大仏は13メートルもある。1252年に建立され、奈良・東大寺の大仏に続く、日本で2番目に大きい仏像だという。もともと、寺の内部にあったのだが、15世紀末に寺が津波で流され、仏像だけがむきだしになって今に至っている。私は、境内の木々に囲まれた静かな場所を選んで、一二三調を吹き始めた。



長谷の大仏

写真：エイドリアン・ベイ



大仏に捧げる尺八演奏

写真：森 麻里子

今度は、鶴見にある曹洞宗総本山・総持寺に行ってみた。もちろん、楽しんでいたのだが、同時にちょっと緊張もしていた。というのも、父が亡くなった2003年に、ここ総持寺で、境内を散策したり、思索にふけったりして1日を過ごし、おおいに慰めとなった。そのときは、数年後にまたここに来て、今度は坐禅に参加することになるとは思いもなかったからだ。説教は日本語で、私のレベルではちょっとついていけない感じだったが、一緒に参加した、ある親切な日本人の女性が助けてくれたおかげで、なんとか最後まで続けることができた。足が石のようになってしまい、もそもそしているうちに、後ろから、バシッと僧に叩かれる場面もあったけど。

総持寺の境内には、木々に囲まれた大きな釣鐘がある。重さは19トン、全長3.5メートル、口径は2メートル近くもある。1913年に作られたそうだ。僧侶が、時間になると、ロープでつりさげられた木の棒で鐘を打つ。その深みのある音が、あたりに響いていく。

私は、釣鐘の近くの林の中で腰をおろし、30分ほど尺八を吹いた。傾きかけた西日の中で、虫たちが鳴き始めた。リラックスした落ち着いた気分で総持寺をあとにした。総持寺はお薦めである。次回も是非、日程にいれたいと思っている。

さて、今度は、京都に行って旅館に泊まる。地元の食材を使い、芸術ともいえるすばらしい盛り付けの夕食も食べてきた。金閣寺の境内で尺八を吹きたかったのだが、そこは、どこもかしこも修学旅行の生徒たちで騒然としていた。あとで、旅館の部屋で庭に向かって吹いた。日本で尺八を吹くと、(日本人の)驚いたようなリアクションがあることに気づきはじめた。



総持寺の僧侶

写真：エイドリアン・ペイン



総持寺の釣鐘

写真：エイドリアン・ペイン

数日後、今度は、東京の築地魚市場を見学してきた。普段は、テレビのネイチャー番組でしか見られないような妙な姿かたち(ついでに強烈な臭いも)の魚がいた。お昼は、魚市場の近くの寿司屋で、その日にとれた新鮮な魚を調理した寿司と刺身を堪能した。昼食後、おなかもこなれたところで、妻の家族の前で初めて尺八を演奏した。彼らは、英国人からこれほどの音色をきけるとは、と感心していたようだ。

キク・デイ先生は、そのとき、ちょうど、大阪の大学で、あるプロジェクトに参加していたので、この機会にお会いできないかと思っていたが、双方のスケジュールがあわず、それはできなかった。しかし、キク先生は、英国を出る前に奥田先生と連絡をつけてくれて、レッスンをうけることができた。最初のレッスンでは、前述のとおり、先生は「手向け」を披露してくれた。この曲が先生から習う最初の曲となった。

なんだか、まだ信じられない。自分でも驚いた尺八の“いきなり注文”から、まだ1年も経っていないのに、自分は、今、奥田先生を前に、少々感傷的になっている。2週間の尺八の旅の中で、すばらしい景色の中や霊的な場所で尺八を吹き、尺八演奏者や製造者にも会った。

奥田先生は、愛嬌のある面白い人物である。もともと有名なジャズ・トランペット奏者だったのが、まったく転向して、尺八、特に地無しを専門に勉強した。彼の独特のスタイルは禅茶房と呼ばれている。奥田先生は、私の独学でついでにしまった悪い癖を直してくれ、うまくいかないところの解決策を提案してくれ、リラックスして、楽しんで吹くことを教えてくれた。



総持寺の用心棒、やくざ猫

写真：エイドリアン・ペイン

イン

みっちり2時間「手向け」のレッスンをうけ、その後、先生との会話もはずんだ。私は、学んだことは全てもらすまいと、ノートをとり、写真もとり、あとで勉強できるように演奏、テクニック、楽譜までビデオに収めた。恍惚感と疲労が入り混じった状態で、先生の茶房を後にした。

日本滞在中は、できるかぎり時間を見つけて練習した。夜にホテルで尺八吹くなると、他の宿泊客の迷惑になる！と妻は非難轟々。「うるさい！」といわれて、やめざるをえなくなる。しかし、彼女がシャワーを浴びているあいだに、また、こっそり吹いていることを妻は知らない。寸分たりとも無駄にはしないのだ。そう、尺八「悠」は、レジンでできているので、シャワーを浴びながらだって練習できるのである！

奥田先生との最初のレッスンから2日後に2回目のレッスンを受けたが、今回も学ぶところが多く、また、かなり疲れるものであった。時間に限り

があるので、できるだけいろんなことをやろうと、奥田先生は「虚空」のレッスンを始めた。「虚空」には、重要なテクニックがたくさん使われているので、じっくり練習しなさいと言われた。本当にむずかしいが、練習しがいのある曲である。

奥田先生は、11月に長野県でとってきた竹でつくった二尺五寸時無し延べがあるんだけど、君も気に入ると思うんだとおっしゃった。吹いてみたが、さすがに長くて、私の短くて太いソーセージのような指で演奏するのは大変だった。だが、その音色はとても柔らかかった。二つ返事でいただきますと言ってしまった。帰りの電車の中では、ひとりでにんまりしてしまったので、きっと、皆、変なヤツと思ったに違いない。

横浜のホテルに戻る前に、予定を変更して、目白にある尺八店に行くことにした。尺八に関するものなら何でも揃っているすごい店だ。店員も皆、尺八のことをよく知っていて、いろいろ教えてくれた。新しく(奥田先生から)買った尺八用に、備品をいくつか買った。

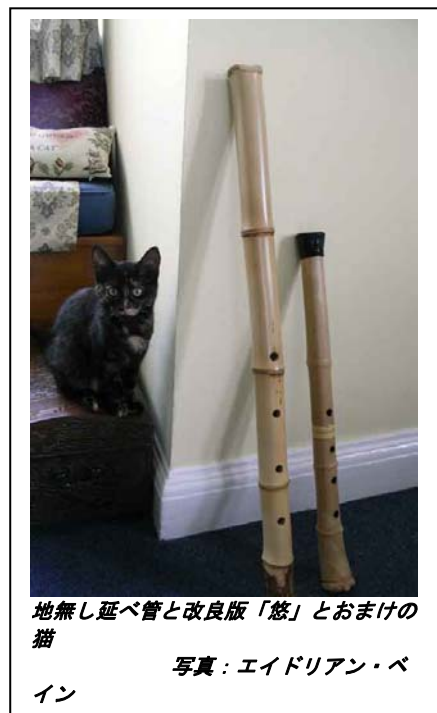
さて、イギリスに戻ってきた。二尺五寸時無しと奮闘している。面白いことに、一尺八寸のいつもの尺八を吹いてみると、今度は、こちらを吹くのが難しいと感じるようになってしまう。なんだか、尺八をやっていると、いつも、おかしいことが起きる。問題を一つ解決すると、また、もっと問題がでてくる。

いまや、尺八が、私の人生の一部となっているといっても過言ではない。だが、いまでも、どうして、こういうことになったのか、よくわからないのである。

尺八万歳！
エイドリアン・ベイン

追記

2日後には、フランスで行われる‘ヨーロッパ・尺八サマースクール2007’に参加します。他の尺八仲間に会うのは新鮮ですが、圧倒されてしまうかも。また、報告しますのでお楽しみに。



地無し延べ管と改良版「悠」とおまけの猫

写真：エイドリアン・ベイン